

# 「身じまい」のおと



◎若林健次

滝野隆浩

社会部編集委員

「私は肝硬変で死ぬだろう。そのことだけは、はっきりしている。だが、だからと言って墓は建ててほしくない。私の墓は、私のごほうびであれば、十分」。寺山修司（1983年没）の言葉だという。カッコいい。△ことはで、十分△だなんて。一度でいいから、こう言い残して死にたい。

鎌倉新書（東京）が主催するお墓探しセミナーの講演で、萩原朔美・多摩美術大学教授（88年没）が教えてくれた。秋原朔太郎（42年没）の孫で、寺山とは親交も深かった。本人は要らないと言っても墓は建てられ、東京・王子の高尾霊園にある。劇団の仲間らがよく墓前に集まるという。「お墓は、生きている人がその人の死を納得するためのものなんです」

朔太郎の娘、つまり朔美先生の母親、葉子（2005年没）も文学を志し作家になった。子供のころ、寝ている部屋の隣で母は執筆を続けていた。夜中に目を覚ますと、明かりが漏れる隣部屋からカサッ、カサカサッという鉛筆を原稿用紙に走らせる音とコロコロと消しゴムが転がる音がしていた。それが子守歌だった。

朔美先生が母について書いた「死んだら何を書いてもいいわ」（新潮社）によると、母はお金

## 墓は生と死が一緒になる場所

もうけをしるなどと決して言わなかった。息子を小説家か芸術家にしたかった。表現にかかわる仕事をさせたかった。

同居して「介護のまねごと」をしたのが186日間。その後入院して2日目、母親は急に亡くなった。講演では、母が残っていたメモのことも話した。84歳で亡くなる10年前、母から一枚のメモを渡された。文面を見ずに机の引き出しに入れておいたのを思い出し、没後、見てみた。そこには「葉子の希い」とあり、次の言葉があった。

葬式なし  
戒名不要  
花、香典不要

そのとおりにした。60代でモダンバレエを本格的に始め、70代でも発表会をやっていた。死ぬ直前まで原稿用紙に向かい続けた母だった。

3年後、朔美先生は目を患った。病院から帰ってきて、「そうだ、病氣のことを母親に知らせよう」と思って……あっ、と気づいた。そうか、母はもういないんだ……。人は、日常の中の何気ない出来事の中で、大事な人の「不在」を思い知る。

「写真なんか、撮って残してもだめ。アルバムつくっても、孫はすぐ捨てます！」。講演で、朔美先生は会場を笑わせた。墓は欲しいと思う。墓前に残された人が集まってわいわいやれる場所。そこでは故人と生き残った仲間、生と死が一緒になる。「パーベキューやりたいですよね、墓の前にそんなスペースがあったらいい」

日本の墓には言葉がないと思う。私はこうだったと、自分の墓に言葉を刻みたい——。「それを考えるために、いま私は生きています」